交流プログラムを通じて得た気づき　～参加者からの声の紹介～

○久米井　彩子さん（NHK　日本放送協会所属）

「より良い社会目指して女性記者がすべきこと
～“マッチョイズム Machoism”からの脱却～」

3 日間で、心に残ったことば…

- 女性の進出で GDP は伸び、経済的に利益につながる。女性の声は、社会のものの見方を支える
- 女性ジャーナリストの役割、女性の仕事の進め方、女性からの発信は極めて重要
- いまのニュースバリューはすべて男性目線。さまざまな視点を報道に入れることはとても重要
- デジタル化で報道の性質は変わった。“私の目線”から始まる記事は社会問題につながっている
- 戦略と社会的通念の両輪でメインストリーム化を
- 政策があっても適応されていなければ意味がない（日本のように）
- 男性にも届くメッセージの発信を
- 働きやすい理想の環境に、男女は関係ない
- Change might come from the outside
- ジャーナリズムの職業文化を見直すことを、いまの女性記者はしている。変革している時期
- 社会の見えていないところに光をあてること。これこそがジャーナリストがやるべきこと
- デジタル化が注目されてメディアは焦っている。だからこそ、ジャーナリストとしての目標を失わないで欲しい

防災先進国なのにジェンダー防災後進国

「ジェンダーと防災の研究は、日本は世界より 20 年遅れている」。衝撃的なことばだった。

最近では、女性目線の被災・防災の問題点は、少しずつ報道が増えてきているように感じていた。しかし、減災と男女共同参画　研修推進センターの浅野幸子氏の講演を聴き、自分の認識と知識の低さを恥ずかしく思った。私自身、被災経験や被災地取材の経験がないこともあり、女性目線からの防災・被災の観点が浅かったことを反省した。

伝えなければならないことは、まだまだ山のようにある。そして、日本が“防災ジェンダー”の面でも先進国になるためには、道のりははるか遠い。防災の公共政策に議論やお金が集中したことで、置き去りにされてきた女性をめぐる問題―。女性が多様化し、地域との連携が希薄になってきている中で、女性が分断せず、横につながりを作るためにはどうしたらいいのか。女性がきちんと「リーダーになりきる」ためにはどうしたらいいか。防災の意識を高めてもらうことが第 1 で、いかに命を守るのか…それを考えることが重要だ。その中に、防災・被災においてどのように女性の視点をいれるか、同時並行で議論していくことの必要性を強く感じた。ただ、現状ではそのハードルは、高いといわざるを得ない。女性だけでなく男性にも、防災ジェンダーを進めることをいかに「自分のこと」のように感じてもらえるか…機会があるごとに、粘り強く伝えていくことは言うまでもないが、工夫する必要もあると感じた。

参加して…

プログラムを通して、とても有意義な意見交換、議論ができた。これまで、他国からの報道などでしかわからなかった女性をめぐるさまざまな問題について、直接、状況が聞けたことの意義は大きかった。そして、国は違っても、ニュースセンターでの女性ジャーナリストが抱える悩みや課題は重なり、日本だけの問題ではなく、グローバルイシューだということを確信した。女性ジャーナリストとして、解決に向けて取組まなければならない課題は多々ある。

意思決定権をもつ女性を増やす、女性にしかわからない課題を伝える、女性記者の育成　etc

女性はもちろんだが、一緒に社会を作っていく男性にもきちんと伝わり、理解してもらえるような情報発信をし続けることの重要性は増している。社会の変革が起きつつある中、この流れを“利用”して、デジタル時代ならではの伝え方をしなければならない。これまでの考え方や伝え方に固執せずに、女性がリードしていく時代なのだと感じた。Challenging ではあるし、一昼夜にして変わる話ではなく、何年も、下手すると世代が変わらないと実現しないかもしれない。しかし、そうさせないようにするのもジャーナリストの役目だと思う、より良い社会を目指すために。

To make everyone happy and to make the world a better place, shed light on different problems from different angles as a female journalist.

○アズリーン・ハニ・アブ・バカルさん（マレーシアン・リザーブ紙所属）

「男女共同参画：あり得ない現実ではない」

男女共同参画、特に女性のエンパワーメントに関する問題は、この数年マレーシアを含むアジア諸国で弾みがついている。2 年前に巻き起こった#MeToo 運動は、より多くの女性が、社会の男女共同参画、特に職場の男女共同参画の促進に期待を寄せるきっかけとなった。

もしこれまでに、たくましくあることを期待されたり仕事のプレッシャーで退職したりした女性なら、かつてはフェミニスト団体だけが擁護していた男女共同参画運動が、普通の女性の心に、そして男性の心にさえも萌芽し出していることを心強く思うであろう。

日本政府、具体的には男女共同参画局の招聘により、私は保守的で男性優位の社会において変革を起こす方法を深く理解し、取組み方を学ぶことができた。日本とマレーシア、そして、ある程度ほぼすべてのアジア諸国において、男性を女性より「高い地位」に置く伝統的な価値観が根強い。

プログラムを通じて行ったすべてのディスカッションから思うことは、男女共同参画については、細心の注意を払って啓蒙し、意識を高めることを目指すべきだ。私たちアジア人の価値観は西欧諸国と大きく異なるので、強硬なやり方を用いると、包摂的な社会の構築への関わりから男性を遠ざけてしまうだけだ。実際、逆効果となる可能性もある。男性は、男女共同参画という目標の協力者にならずに、女性を遠ざけてしまうかもしれない。

包摂的な社会を構築するため行動する前に、検討すべきいろいろな要因がある。パネリストの久米井彩子氏が述べたように、ジェンダー問題は女性のみの問題とされるべきではない。男女双方が繁栄できる社会を実現したいという社会問題として取組むべきである。

マレーシアでは、男女の雇用機会は均等であるものの、結婚や出産という社会的なプレッシャーにより、仕事を続けることは一般に難しい。今回の Hasshin!プログラムで、他の参加国でもこれが共通する一般的な問題であることを学んだ。

メディア業界を具体的にみると、韓国以外にはメディア業界で働く女性を代表する女性団体がないことにも気が付いた。このことで女性記者は不利な立場に置かれ、職場での差別にさらされやすくなる。労働組合やネットワークがないことで、女性社員は会社のなすがままだろうし、男性優位の業界では男性に女性の窮状を理解してもらうことはかなり難しい。

当然ながら、私たちはプログラム中、メディア業界の女性の地位について話し合い意見を交換した。では、メディアで働く者として私たちは何をすべきなのか？　第一に、私たちは報道だけではなく情報を与え啓蒙するという、メディアの主たる役割に立ち戻るべきだと思う。

どうするのかというと、まずは、女性の問題があるということを気付かせることだ。#MeToo 運動で、より多くの女性が、性的嫌がらせ、同一賃金、包摂的な政策などさまざまな問題を浮き彫りにするプラットフォームを手に入れた。だから今こそ、私たちはこのような問題について一般の人に向けて記事を書いたり報道したりすべきなのだ。今回のカンファレンスで初めて知ることができた治部れんげ氏と武田耕太氏の言葉を引用しているが、私はこれらの言葉のおかげで、日本人は今起こっていることを認識し、それだけでなく前に進む最善の方法について話し合えるようになったと思っている。

また、メディア業界で働く女性が増えることは助けにはなるが、ある程度までである。したがって、政府や当局が女性のリーダーシップの役割増進を働きかけるべきである。女性のリーダーがいれば、人が他人に対して持つであろう恥ずかしいという気持ちや偏見を減らす一助となるだけでなく、報道組織が女性の観点からニュースを観られるようになり、よりよい報道に繋がる。

また、報道組織は、女性記者の仕事に対して過保護であってはならない。女性記者は、男性記者と同じように災害や戦争の報道など「ハードな任務」を許可されるべきだ。ここでも、包摂的な社会の構築について話したいと思うなら、女性は機会均等、同一賃金、輝くための平等なプラットフォームなどの公平な競争の場を与えられるべきだろう。したがって、組織内でワーク・ライフ・バランスを奨励する方針を導入することは、女性だけでなく男性社員にも有用な場合がある。

メディア業界において政府の介入は役立つだろうか？　女性が法的に平等な待遇を提供されるべきだという点では、その通りである。関係当局は特に差別と嫌がらせに直面した場合の、働く女性の権利と問題に精通するべきである。司法の前では誰もが平等であるのだから、働く女性による通報には注意を向けるべきである。皆が自らの役割を正しく果たせば、包摂的な社会は不可能ではないであろう。

発進宣言

交流プログラム参加を通じて得た様々な気づきを踏まえ、各女性記者が「発進宣言」をした。これは、女性記者がメディア業界における女性活躍を「発進」する主体となり、今後どのような行動をとるかの宣言である。

メディアでの女性が働きやすい環境づくりの経験共有をする

ジェンダー課題にもっと着目する

メディアで働くワーキングマザーを支援する新しい方法を考える

ニュース編集室でのジェンダー、年齢、国籍の多様化に向けた行動をとる

他の女性に刺激を与えるようなロールモデルの記事を書く

HAS

支援が必要な分野を輝かせる光となり、同じ道筋にある人に前進するための道を示す

女性記者として様々な社会課題に様々な視点から光を当てる

刺激的で野心的な女性の話題を取り上げる

疑う前にやってみる

ジェンダーにおける固定概念を打ち破る男性を記事に取り上げる

ジェンダー平等について「ジェンダー平等」という言葉を使わずに記事を書くなど、新しい視点から記事を書く

記事を通して、私が属するコミュニティの学びに役立てる

はっきりと意見を述べ、職場のみんなを信じ、団結を強める

女性・男性記者両方の労働状況を考慮し、改善のための行動をとる

ジェンダーにおける男性の考え方を変えるため、男性をターゲットとした記事を書く

会社における男女比 50:50 を推進する

ネットワーク形成、発言の場の提供、女性活躍の記事を書くことで、若い女性記者の活躍に寄与する

SHIN!

今こそ女性が立ち上がり、声を届ける時です！　Hasshin!

女性の権利は人間の権利

自分の”目線”を大切にした記事をもっと発信します！！

もっとたくさんの女性に意見を述べるチャンスを与える

ニュース編集室、記事、日常生活において、男女比 50:50 を目指す！

男性と女性のより良いパートナーシップを形成し、ジェンダー平等のより良い理解を目指す

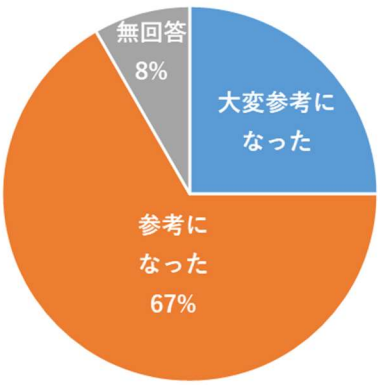
女性、高齢者、子供の権利の提唱者となる

プログラム参加者事後アンケート結果

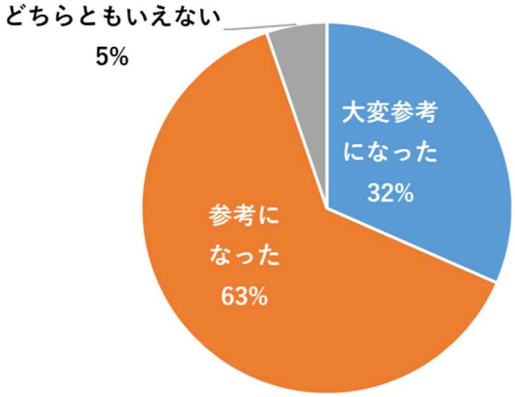
１日目　シンポジウム

○パネルディスカッション「女性記者の活躍と未来」

日本からの参加者の 92%、海外からの参加者の 95%が「大変参考になった」または「参考になった」と回答した。各国の状況やそれぞれパネリストの視点などが参考になったという意見のほか、男性の巻き込みや男性からの男女共同参画の視点の重要性を認識したというコメントもあった。



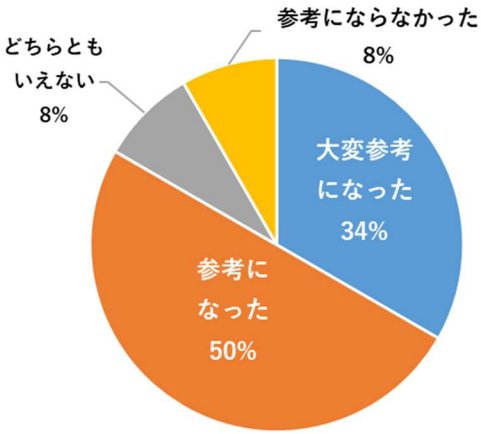
日本からの参加者



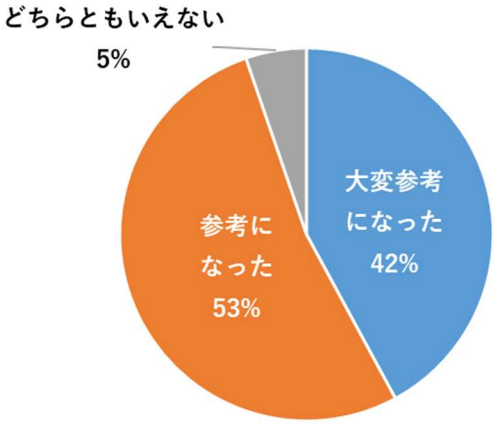
海外からの参加者

○グループディスカッション

日本からの参加者の 84%、海外からの参加者の 95%が「大変参考になった」または「参考になった」と回答した。他国の状況について理解が深まったことや、女性記者同士あるいは一般参加者と意見交換ができて良かったとする回答が多かった。



日本からの参加者



海外からの参加者

○国際交流

「国際交流では他の記者や一般参加者と十分交流できたか」という質問に対し、日本からの参加者の 83%、海外からの参加者の 95%が「交流できた」と回答した。

２日目　視察

○視察のグループ分け

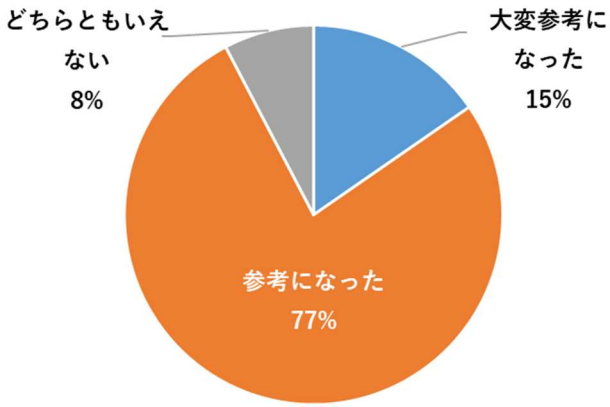
テーマ	日本	海外
少子高齢社会と介護	３人	７人
スポーツと女性の健康	４人	３人
バリアフリー社会	３人	６人
防災	３人	４人
計	13 人	20 人

○視察プログラムへの満足度

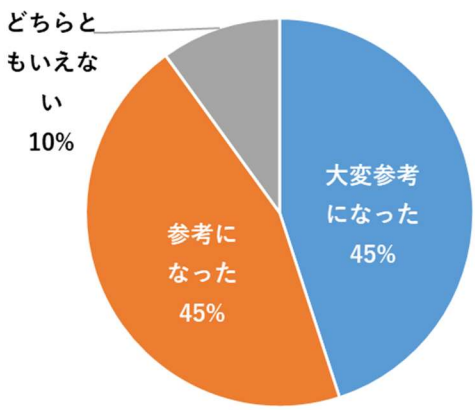
テーマ毎に、午前と午後にそれぞれ１カ所ずつ視察を行った。午前中のプログラムに対して、日本からの参加者の 92%、海外からの参加者全員が「大変満足」または「満足」と回答したほか、午後のプログラムについては、日本からの参加者の 92%、海外からの参加者の 85%が「大変満足」または「満足」と回答した[2]。

○視察を通じ、他の参加者と交流し、今後の取材や発信の参考となったか

日本からの参加者の 92%、海外からの参加者の 90%が「大変参考になった」または「参考になった」と回答した。



日本からの参加者



海外からの参加者

参加者からの主なコメントは以下のとおり。

- 他国からの参加者の取材や問題意識の視点を知ることができた。彼女達が今回の取材を通じて、どんな記事を発信するのか楽しみ。
- 海外の女性記者の質問を聞けたことで、海外向けに原稿を書く時にどのような情報を掲載すべきかについて考えることができた。

[2]「グループ A: 少子高齢社会と介護」については、午前に「課題に取組む団体」を、午後に「課題についての知識を有する団体」を訪問した。

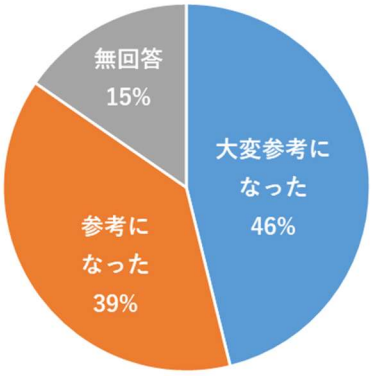
３日目　意見交換会

○視察プログラムの振り返り

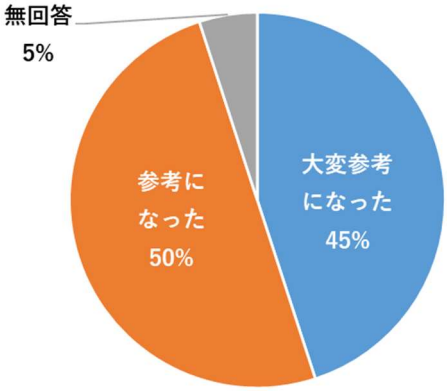
「他の参加者との視察内容や感想の共有は参考になったか」という質問に対し、日本からの参加者の92%、海外からの参加者の 90%が「大変参考になった」、「参考になった」と回答した。

○参加者によるショートプレゼンテーションが参考となったか

日本からの参加者の 85%、海外からの参加者が 95%が「大変参考になった」または「参考になった」と回答した。他国だけでなく、同じ国の他社の取組が参考になったという回答もあった。



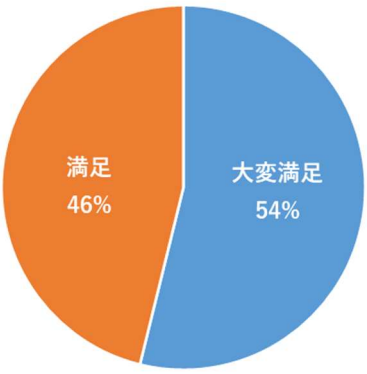
日本からの参加者



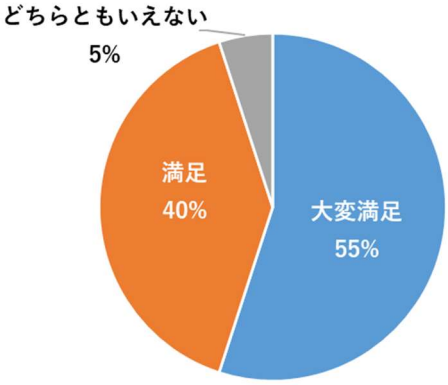
海外からの参加者

○グループ討議に対する満足度

日本からの参加者全員、海外からの参加者の 95%が「大変満足」または「満足」と回答した。
グループ討議を通じて、他国との相違点に気付いたという声が複数挙げられた。



日本からの参加者

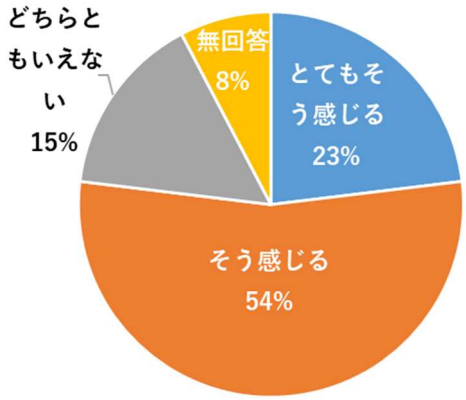


海外からの参加者

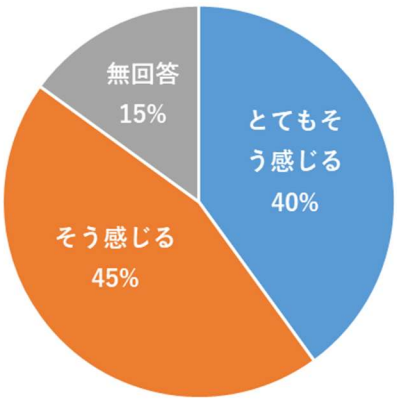
交流プログラム全体

○交流プログラムのテーマ・内容は適切だったか

日本からの参加者の 77%、海外からの参加者の 85%が「交流プログラムのテーマや内容は適切であった」と回答した。



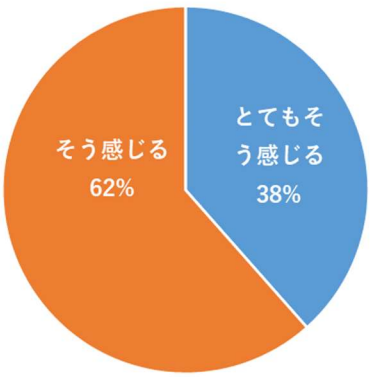
日本からの参加者



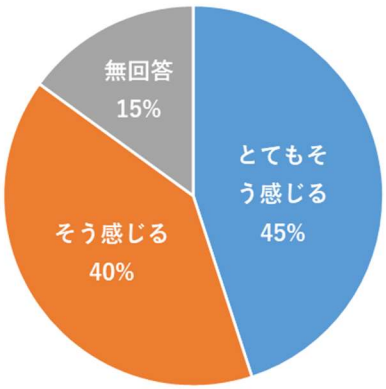
海外からの参加者

○交流プログラムを通じて得た知識・経験は今後の取材や取組に役立つと感じたか

日本からの参加者全員、海外からの参加者の 85%が「交流プログラムで得た知識・経験は今後の取材や取組に役立つ」と回答した。「自分の仕事について改めて考えるきっかけとなった」というコメントが多く挙げられた。



日本からの参加者



海外からの参加者